

と考えられたので報告する。

17 9年間で7回の切除を繰り返した後腹膜原発紡錘細胞肉腫の1例

多々 孝・植木 匡・若桑 隆二
石塚 大

厚生連刈羽郡総合病院外科

症例は男性で1997年の51歳時に右下腹部後腹膜腫瘍の診断にて膀胱壁と小腸部分切除を伴う腫瘍切除術を施行した。形態学的に紡錘細胞肉腫であったが、免疫組織化学検査にて組織型は同定できなかった。その後8ヶ月から2年6ヶ月の間隔で6回の再発を繰り返した。再発腫瘍の切除にはいずれも腸管合併切除を必要とした。再発時の症状は腫瘍の触知かCTによる指摘が主であるが、絞扼性腸閉塞症状と下血による貧血が1回ずつあった。現在までの腸管切除長は2m28cmであるが短腸症候群の症状はない。後腹膜悪性軟部腫瘍は比較的まれな疾患であるが、再発を繰り返す症例がある。長期生存を得るために積極的な再発腫瘍切除が必要であると思われた。

18 結腸癌術後、肝・肺転移、Krukenberg転移、Schnitzler転移、Sister Mary Joseph noduleを5回の手術により切除している1例

丸山 智宏・河内 保之・高橋 元子
田中 亮・嶋村 和彦・北見 智恵
西村 淳・新国 恵也

厚生連長岡中央総合病院外科

腹膜播種を伴う結腸癌症例で転移再発・切除を繰り返し6年生存中の症例を経験したので報告する。

平成13年4月下行結腸癌で左側結腸切除を行った。この際、回腸間膜に約1cmの腹膜播種を1ヶ所認め切除した。平成14年8月肺転移で切除。平成16年3月卵巣転移で切除。平成17年8月肺転移で再切除。平成18年1月肝転移で切除。平成19年1月Schnitzler転移、Sister Mary Joseph noduleを認め、いずれも切除した。他に腹膜播種、

転移はなかった。この間1-LV+5FU, UFT+LV, FOLFOX6, IFL, S-1などの化学療法を行っていた。現在再発なく、外来通院中である。

化学療法と外科的切除が奏功し、腹膜播種のある結腸癌の長期生存例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

19 異時性肝転移を認めた大腸sm癌の1例

佐々木正貴・宗岡 克樹・白井 良夫*
若井 俊文*・坂田 純*・豊島 宗厚**
島田 能史*・畠山 勝義*

新津医療センター病院外科

新潟大学大学院消化器・一般外科
学分野*

新津医療センター病院内科**

異時性肝転移を認めた大腸sm癌の1例を報告する。

症例は58歳、女性。2004年1月のCFでS状結腸のIsp型大腸癌を認めた。径25mmの病変で、sm massiveの所見を有するため、2004年2月、S状結腸切除術(D2)を施行した。病理所見はsm2, ly0, v0, n(-)であった。術後補助化学療法は施行しなかった。2006年8月腫瘍マーカーの上昇を認め、CT上右肝静脈基部および中肝静脈分岐部に接する肝転移を認めた。2006年11月拡大肝右葉切除術を施行し、病理所見では右肝静脈、中肝静脈に浸潤は認められたが、断端は陰性であった。大腸sm癌の肝転移症例は稀であり、文献的考察を加えて報告する。

20 当院における腹腔鏡下大腸手術の現況

高橋 元子・西村 淳・丸山 智宏
石川 卓・内藤 哲也・河内 保之
新国 恵也

厚生連長岡中央総合病院外科

【目的】当院では大腸癌手術の約4割が腹腔鏡下で行われている。腹腔鏡下大腸手術の現況をまとめた。

【対象】2006年12月までに当院で腹腔鏡下大腸

癌手術を行った134例

【結果】平均年齢は60±12.0歳，部位別症例数の上位はS状結腸癌37例，上行結腸癌33例．進行度別症例数は早期癌54例，進行癌81例で年々進行癌の割合が増加．術中合併症は血管損傷3%，腸管損傷1.5%，術後早期合併症は創感染9%，腸閉塞3.7%，縫合不全1.5%．開腹への移行は16例で最多原因は癒着であった．開腹手術症例と比較を行うと手術時間は腹腔鏡下手術で有意に長かったが出血量，術後の在院日数，排ガスまでの日数，歩行までの日数は有意に短かった．術後早期合併症は有意差なかった．

【結論】腹腔鏡下大腸手術成績は開腹手術のそれと比し劣らない．今後は長期成績を出していきたい．

1330 SNPs の case-control 解析により，3 遺伝子座の 18 SNPs が LOAD と有意に相関することを見出した．そこで，これらの SNPs と性別，年齢，LOAD の強力なリスク遺伝子である *APOE* (ϵ 4 アリル) を含めた相互作用解析を行った．本研究会ではその結果について考察・議論したい．

2 Bcl11b/Rit1 遺伝子の腸管腫瘍への修飾効果

佐藤 俊大・葛城 美徳・岩崎 友洋
小幡 美貴・廣川 祥子・三嶋 行雄
木南 凌

新潟大学大学院医歯学総合研究科・
遺伝子制御講座・分子生物学分野

Bcl11b/Rit1 は放射線誘発マウス胸腺リンパ腫の遺伝解析から単離された新しいがん抑制遺伝子であり，ノックアウトマウスの発がん実験からハプロ型不全を示すことが明らかとなった．ヒト Bcl11b 遺伝子座は T リンパ球性白血病で染色体転座が観察されるが，ヒト大腸がんでも高頻度に LOH が観察される．これは大腸がんの発症に Bcl11b 遺伝子が関与する可能性を示唆する．そこで，大腸がんモデルである Min マウス (*APC^{Min/+}*) と Bcl11b-KO ヘテロマウスを交配し，Bcl11b 遺伝子型の違いによる大腸・小腸がん発症への影響を調べた．生後 18 週でマウスを安楽死させ，腸管を固定後，腸管内の腫瘍（腫瘍）を肉眼および顕微鏡下で観察した．変異 APC が遺伝したマウスでは予想通り腫瘍が観察され，その後は Bcl11b 遺伝子型の違いにより明らかな違いを示した．一方，腫瘍の平均サイズは変化しなかった．これらの結果は，一つの Bcl11b 遺伝子に欠損があると腫瘍形成の進展を早めないが，腫瘍発生の頻度を上げる，ということを示唆する．

第7回新潟ゲノム医学研究会

日時 平成19年6月9日(土)
午後1時～5時
会場 新潟大学統合脳機能研究センター
6階 セミナーホール

I. 一般演題

1 染色体10qにおけるアルツハイマー病のリスク遺伝子相互作用解析

宮下 哲典・朝倉まどか・郷野 辰行
武井 教展・桑野 良三
脳研究所・附属生命科学リソース研究
センター・バイオリソース研究部門

我々は染色体10qに焦点を絞り，晩期発症型アルツハイマー病 (LOAD) のリスク遺伝子探索を行った．LOAD 1526例，対照 1666例を用いた